



研究者名※	黒子康弘	学位※	文学修士
所属※	文学部 史学科	職名※	教授
連絡先	kurogo@fc.jwu.ac.jp		
URL			
researchmap※	https://researchmap.jp/read0207557		
研究分野※	人文学		
研究キーワード※	ドイツ語圏文学、ヨーロッパ文学、比較文学、西洋哲学、西洋思想、キリスト教、社会思想、文学理論、批評、リルケ、ゲーテ、神秘主義、異端思想、敬虔主義		
共同研究・競争的資金等の研究課題	<ul style="list-style-type: none"> ① 1998-1999 年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)「西欧近代における観念の図像化運動,あるいはイメージ思考の研究」(研究分担者) ② 2000 - 2001 年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)「西欧近代における観念の図像化運動,あるいはイメージ思考の研究」(研究分担者) ③ 2001-2003 年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)「オーストリア戦後文学の現況—1989年以降を中心に—」(研究分担者) ④ 2002 - 2003 年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)「〈文化史〉叙述モデルの研究-20世紀を例として-」(研究分担者) ⑤ 2002 - 2004 年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)「西欧近代における観念の図像化運動,あるいはイメージ思考の研究」(研究分担者) ⑥ 2003- 2005 年度文部科学省科学研究費補助金・若手研究(B)「プロネーシスの学としての文学研究のための基礎的研究-音と言葉の関係をもとにして」(研究代表者) ⑦ 2006 - 2007 年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)「1900 年世紀転換期ウィーンのスキャンダル-文化の葛藤対立理論の研究」(研究分担者) ⑧ 2007 - 2008 年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)「1910 年から 1960 年までのドイツ語圏の社会文化的ディスクルスの研究」(研究分担者) ⑨ 2009 - 2010 年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)「文化学的転回のトポスとしての『日本の家』研究 —西洋と日本を結ぶ建築家の言説」(研究分担者) ⑩ 2010 年度公立大学法人首都大学東京若手奨励研究費「リルケに対するゲーテの影響の再検討」(研究代表者) ⑪ 2012 - 2015 年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)「リルケとゲーテの連関に関する実証的・歴史的・哲学的研究」(研究代表者) 		
社会貢献・産学官連携活動等	日本感性工学会 評議員(2007年9月から2009年8月) 日本感性工学会 社会学部会 幹事(2005年9月から2014年9月) 日本オーストリア文学会 編集委員(2008年6月から2011年6月) 日本オーストリア文学会 幹事(2011年6月から2020年5月) 日本女子大学史学研究会 運営委員(2018年11月から現在)		
受賞歴	日本感性工学会 出版賞 (2005年 9月)		

研究領域	ドイツ語圏文学、ヨーロッパ文学、比較文学、西洋哲学、西洋思想、キリスト教、社会思想、文学理論、批評	(SDGs)
------	---	--------

<p>研究テーマ※</p>	<p>①リルケとゲーテの詩的連関とその西洋精神史的意味の検討</p> <p>② 18 世紀ドイツ文学革命の根源・背景・影響に関する包括的研究</p> <p>③リルケ受容史の分析を通じた 20 世紀精神史の構築</p>
<p>概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)</p>	<p>【研究の背景・目的・内容】 19世紀末から20世紀前半に活躍したオーストリア＝ハンガリー帝国出身のドイツ語詩人ライナー・マリア・リルケの詩作および存在の意義を、ドイツ精神史の中に適切に位置づけることが目的である。研究テーマに挙げた3つの論点は、以上の問題意識の具体的な切り口を意味する。中でも「ゲーテとリルケの詩的連関」については、従来のリルケ研究においてほとんど問題にされなかったが、これを解明することは、リルケという20世紀最大のドイツ語圏詩人の歴史的意味の確定に決定的な働きを為すと考える。この両者の存在は、いわゆるドイツ近代文化というものの明確な範囲を措定するなら、その開始点と終末期の両極に屹立しているからである。つまり18世紀ドイツ文学革命がゲーテによって開始されたとするなら、リルケはその完成者であると同時に破壊者の位置にある。両者の比較は、ドイツ近代精神史の記述に資するところが大きい。また、そこから必然的に次のような問いが生じる。そもそもの18世紀ドイツ文学革命を生じさせた社会的・文化的要件は何か。その根源はどこに求められるのか。その歴史的意義は何か。そこで、18世紀ドイツ文学革命の根源、背景、影響に関する包括的研究に導かれることになる。この革命の根は非常に深く複雑多岐に亘っていて、古典古代の文学や思想から、中世の神秘主義や近世初期の宗教改革、キリスト教圏異端思想、さらにイギリスやフランスを中心とするドイツ周辺諸国の文学的・思想的脈絡にまで探求の範囲を広げる必要がある。イギリスやフランスに比較して大きく未発達段階にあったドイツ文学が、短期集中的にヨーロッパを代表する強力な創造力を発揮始めたことは、その時代のドイツだけを見ても解明は困難である。歴史を可能な限り遡行し、その根源が的確に見定められる必要がある。また、ドイツ近代文学の範疇を大きく超え、それ自体革命的な言語表現を追求したリルケの詩作は、非常に謎めいており、その死後、20世紀全般に亘って解釈の猛威ともいえるアカデミックな活動を、我が国を含めた多くの国において持続させた。その意味で、20世紀のリルケ受容史の分析は、ドイツのみならず、我が国を含めた世界的な視点での20世紀精神史記述モデルの探究に資するところが大きいと考えている。</p> <p>【研究方法の特色・研究の展望】 先ずゲーテとの内的な連関を示すリルケの書簡を正當に評価し、両詩人の実際の詩作品についても語彙の類似・影響関係の観点から注意深く記述する。第二に、Dichtung und VolkstumやDeutsche Vierteljahresschriftといった文学専門雑誌に代表されるリルケ受容の最初期における文芸思潮の特徴を明らかにし、戦前と戦後における「ゲーテとリルケ」というテーマの問題点と可能性を客観的に記述する。第三に、第一の論点「リルケ自身の言説の分析によって浮かび上がるリルケとゲーテの連関」を、第二の論点「リルケ没後最初期の受容と戦後の評価の分析によって浮かび上がるもの」に掛け合わせて、いかなる像が見えてくるのか、両者の齟齬や符合などについて丹念に記述する。第四に、第三の論点で明らかになったことを、ゲーテ時代からリルケの時代、さらに現代に通じる大きな歴史的脈絡の中で、批判的に検討する。この段階で、「リルケとゲーテの連関」の様々な検証可能な客観的事実の奥に一步踏み込んで、「感情Gefühl」、「雰囲気Stimmung」、「情念Affekt」といった近代ドイツ抒情詩人の共通の問題意識を追究し、それを、二人の詩人の生きた時代の社会状況、思想、哲学、芸術、歴史的位相に照らして論じることが試みられる。さらに、これらを、中世神秘主義や近世初期の宗教改革、キリスト教圏異端思想、さらにドイツ周辺諸国の文学的・思想的脈絡といった巨視的な歴史意識に照らして評価することで、ドイツ精神史記述に新たな光を当てることができると考えている。</p>
<p>本研究関連 特許・論文等</p>	
<p>共同研究・外部機関 との連携への期待</p>	